

保育者の身体スキル育成のために舞踊家の教育プログラムを応用する意義

白澤 舞 (長野県立大学)

1. 背景および目的

幼稚園教育要領等の解説には、保育者は子どもと共によりよい保育環境を創造するため、子どもが行っている活動の理解者、子どもとの共同作業者としての役割が大切であるとし、「幼児は自分の思いを言葉で表現するだけではなく、全身で表現する。幼児に合わせて同じように動いてみたり、同じ目線に立ってものを見つめてみたり、共に同じものに向かってみたりすることによって、幼児の心の動きや行動が理解できる」とし、保育者の身体的な保育行為について具体的に解説されている。このように、保育における保育者の身体の在り方が具体的に示され、重視されてきた。しかし、保育者の身体的な資質・能力の重要性について議論されることは多いものの、身体的な資質・能力の育成に関する研究や、具体的な教育法の研究は少なく喫緊の課題とされている¹⁾。

そこで本研究の目的は、子どもと共に保育環境を創造する保育者に求められる身体的な資質・能力を検討し、その育成のために舞踊家 Trisha Brown (1936-2017)の教育プログラムを応用した学びの内容を検討することである。

2. 保育者に求められる身体的な資質・能力

無藤²⁾は、保育の基本である「環境を通しての保育」の根底にある原理の理論化を試み、保育とは、子どもが対象に見合った「動き」(=子どもと対象との動的な身体関係)の多様な可能性を探求することを保証するものであるとした。

佐伯³⁾は、発達、関係の中で生起するものであり、発達するというのは関係性の広がりであり、関わる世界の広がりだとする。幼児が世界と関わるには、「この私の身に“なってくれる”」という共

感的関係をつくれる他者の存在が不可欠であり、それは、子どもの動きを模倣し身体感覚を「共に」して子どもの抱く世界を実感として納得し、その上で、子どもと協働して「共に」の世界をつくりだしていく共感的他者であるとしている。

榎沢⁴⁾は、「他者(が世界をどう体験しているか)を理解しようとするとき、その身体の在り方を視野に入れることが必要になる」とし、保育者の身体は、意識的な意図の発生に先立って自ずから動きだす身体でなければならないとしている。

すなわち、保育者には、環境に存在する対象(人・事物)との関係を探求し、多様な「動き」(身体的関係)を生みだす子どもの身になり、身体感覚を共にすることで協働して新たな「動き」をつくりだせる、自ずから動きだす身体が求められていると考えられる。

3. 舞踊家 Trisha Brown の教育プログラムを応用した学びの内容

Brown は舞踊作品創作において、意識的な意図を超えた身体そのものが持つ機知や思考「身体的直感」を発揮させ、多様な動きを生みだした。

「身体的直感」が発揮される身体、すなわち「自ずから動きだす身体」を育成するための学びの内容は、Brown の教育プログラムを応用すると次のように考えられた。

- ①自分自身の身体に向き合い、身についてしまっている筋肉の緊張を取り除くことで関節を解放させ、身体が生来持っている可動性を取り戻す学び
- ②身体に備わっている運動感覚の機能が持つ思考的な側面の存在を認識するための学び
- ③②の機能を発揮させるためには、①の状態を保って動くことが必要なため、身体の動きを内側から受動的に感覚しながら動くことを習得する学び

文献

- 1)新山順子ら 2014「保育者養成における身体表現教育に関する研究動向と課題」
- 2)無藤隆 1996「身体知の獲得としての保育」
- 3)佐伯胖 2007「共感：育ち合う保育のなかで」
- 4)榎沢良彦 1997「園生活における身体の在り方」